

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：32629

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780284

研究課題名(和文) 高齢期ワーク・ライフ・バランスの研究 簡易版生活時間調査の開発による実態把握

研究課題名(英文) Work-life-balance in Later Life: Developing a Simplified Questionnaire for Time Use Survey

研究代表者

渡邊 大輔 (Watanabe, Daisuke)

成蹊大学・文学部・准教授

研究者番号：20629761

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高齢期のワーク・ライフ・バランス(WLB)の実態について明らかにすることにある。そこで、簡易版生活時間調査の質問票を開発し、他の属性を含めたWEB調査を行った。その結果、中高齢期のワーク・ライフ・バランスを考慮する際には余暇活動のあり方が重要であること、また、ケア(育児、介護)をおこなっている層については、細切れの育児、介護を過ごすパターンが抽出され、このような細切れのケアが健康に与える影響が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to examine patterns in daily behaviors of older Japanese and to consider a concept of work-life-balance in later life. Older people face on problems how they keep a balance on social participations which are included labor work, housework, care work and leisure activities. Previous studies which focused on time-use in later life tended to focus on quantitative aspects on time-use such as average and ignored holistic and sequential aspect of daily time-use patterns. In this study, firstly I developed new simplified questionnaire for time use survey. Used sequential analysis, I describe the patterns of work-life-balance in middle and old age and the feature of time use in middle and old age is fragmented care work.

研究分野：社会学

キーワード：高齢期 ワーク・ライフ・バランス 生活時間 系列分析 ケア

1. 研究開始当初の背景

日本の人口高齢化は急速に進展しており、2017年9月時点で65歳以上の高齢者人口比率は27.7%、75歳以上の後期高齢者人口比率は13.8%である。高齢化が進むなかで、元気に働きながら日常生活を送る高齢者の割合も増えており、男性では70~74歳で34.2%、女性では20.9%もの方が働いている。同時に、長寿化にともないサポートを必要とする高齢者もまた増えており、要介護者の発生率は、75歳以降からは加齢とともに上昇している。要介護者への主な介護者もまた高齢者が半数以上を占め、老いてもなお介護の重要な担い手となっている(大和 2008)。

ここから、現在の高齢者は、就労などの社会参加と家庭における介護、そして自身の健康の3つのバランスという問題に直面していることが予想される。すなわち、この問題は、高齢期のワーク・ライフ・バランス(WLB)と健康の問題である。日本では、WLBの考え方は少子化対策の文脈でもちいられることが多いが、子育て期だけでなく高齢期にも適用できると考えられる。

この高齢期のWLBについての調査は乏しい。これは、高齢期研究が就労、社会参加、介護と個別の領域ごとに行われてきたこと、また各行動率や活動量の把握が中心であり、その活動パタンの把握が行われてこなかったためである(Lensnard 2010)。この状況に対して、海外では生活時間調査をもちいて高齢期のWLBを描く試みも行われている(Fisher et al. 2011)。また、WLBの分析でもちいられる「社会生活基本調査」などの生活時間調査は、生活時間については詳細に把握しているものの、他の属性(健康状態、社会階層、社会関係など)を調査しておらず、誰がWLBに困難を抱えているのかというメカニズムの分析、さらに、その帰結としてWLBのバランスを崩した果ての帰結についての分析ができない。本研究は、簡易版生活時間調査の質問票を開発し、他の属性を含めて調査することで、この問題の解決をめざす。

2. 研究の目的

本研究の目的は、高齢期のWLBの実態について明らかにすることにある。現在の高齢者は、社会参加と家庭における介護、そして自身の健康の3つのバランスをいかにとるかという問題に直面しているが、その具体的な日常生活の活動パタンの把握は行われてこなかった。

そこで、本研究の目的を達成するために、2つの目的を定める。

(1) 目的1: 簡易版生活時間調査の開発

簡易版生活時間調査の質問票を開発することである。既存の代表的な生活時間調査である総務省「社会生活基本調査」は、生活行動に関する項目が20項目あり、24時間を15分ごとに96分割して行動を測定している。

しかしこのような調査を一般の方に答えてもらうことは困難を伴う。そこで、ケア労働を踏まえたWLBの問題を考察するための簡易版の生活時間調査を開発する。

(2) 目的2: 生活時間パタンの把握とメカニズムの解明

開発した簡易版生活時間調査をもちいたWEB調査をおこない、高齢期の日常生活のパターンを類型化を試みる。さらに類型化したパターンを、同時に収集した他の変数をもちいて分析することで、高齢期のWLBの実態とそのメカニズムの解明を行う。

3. 研究の方法

高齢期のWLBについてその実態を把握するために、本研究では大きく3つのプロジェクトを実施した。

(1) 簡易版生活時間調査の開発

生活時間を簡便かつ、就労のみならずケア労働が重要となると想定される高齢期のWLBの実態を測定可能な簡易版生活時間調査を開発をおこなう。またこれらの項目が妥当であるかについては、一般高齢者に紙面によるテスト調査をおこなうことで、その回答可能性を把握する。

(2) WEB調査による生活時間の測定

開発した生活時間調査と、各種属性、および、健康指標などのアウトカム項目をもちいたWEB調査を実施する。WEB調査をもちいる理由は、パターン抽出にたるサンプル数を回収することと予算の兼ね合いを考えると、紙面による調査では困難であること、また、回答漏れなどがコントロールできることからWEB調査をもちいる。

調査対象としては、40歳以上の中高年齢者を対象都市、育児および介護を現在提供しているものといないもの双方に対しての調査をおこなう。母集団を単純に人口比例させるのではなく、育児と介護のどちらか一方または双方を現在行っている人と、それ以外の人をそれぞれ同数対象とした。

(3) 系列分析をもちいた生活時間のパターン分類とその健康への影響の分析

これまでの生活時間の分析は、その平均時間として観察される時間的側面、すなわち活動量が注目されてきたが、実際の生活では、生活行動の順番や組み合わせ、長さなどは多様である。そのため生活時間のパターンを考える際には、活動量だけでなく、生活行動の順序や長さを考える必要がある。そこで生活時間を分析する上での有効な系列分析の手法を把握し、その手法をもちいて生活時間のパターンを抽出する。そのうえで、抽出したパターンによって健康度が異なるのか、またそのパターンを形成するメカニズムがどのようなものか、回答者の社会階層や家族構成、学歴、

居住地などの情報を収集して分析を行う。

4. 研究成果

(1) 簡易版生活時間調査の開発

簡易版生活時間調査の開発においては、プロトタイプ of 調査票を作成したうえで、A 市内の老人クラブに所属する 12 名の高齢者にテスト回答してもらうとともに回答しやすさなどについてヒヤリングをおこない、修正するというプロセスを経た。

この検証プロセスを経た結果、既存の調査よりも簡便に回答できるよう、測定間隔を 30 分おきとし、また、昼夜逆転している人も把握できるように午前 0 時から翌午前 0 時までの 24 時間ではなく、午前 0 時から翌午前 4 時までの 28 時間を 54 回区分で測定することとした。これは、翌午前 0 時までには就寝していない人が回答しにくくなることを考慮したためである。既存の調査との比較を想定して開始時間は午前 0 時とし、多くの人々が就寝している午前 3 時前後を区切りとするべきであることから午前 4 時とした。

測定する生活行動については、簡素化のため活動項目は 10 項目程度を目標とし、中高年齢期を想定した行動に絞ることとした。その結果、「社会生活基本調査」が 20 項目を設定して調査していたのに対して、高齢期や育児・介護等のケア活動をおこなっている人の分析をおこなうことを想定することから、家事については、「家事」「育児」「介護」を区分すること、かつ、高齢期における余暇の過ごし方については、能動性の有無を考慮し、自発的におこなう能動的な余暇として「趣味・娯楽・スポーツなどの余暇活動」を、逆にゆっくりとくつろぐ非能動的な余暇として「休養・くつろぎ・テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」を設定し、さらに「学習・自己啓発などの学習」も設定した。この結果、最終的には時間が 54 区分、生活行動が 12 項目の調査票となった。

(2) WEB 調査による生活時間の測定

実査は、生活時間の入力のしやすさや経費等を考慮し、調査会社の登録モニタを対象とした WEB 調査として行った。WEB 調査という手法を選択することから、75 歳以上の高齢者は非常に人数が限られることから、対象年齢は 40~74 歳とした。調査項目は、開発した簡易版生活時間調査の項目のほかに、介護提供および社会参加の有無とその経験をもちいた。また、アウトカム項目として各種の健康指標や幸福感などを測定し、個人レベルの社会関係資本項目（支援ネットワーク）を媒介変数の候補として設定した。統制変数として、性別、年齢、社会階層（職歴）家族構成、学歴、等価所得、地域状況を質問した。

育児や介護などのケアに従事していることが今後の中億年齢期の WLB を考察する上で重要となるという観点から、現在、育児または介護のいずれか一方または双方をおこ

なっている人と、行っていない人の対象を等分し、それぞれについて 2015 年の国勢調査に比例するよう、性別、年齢 5 歳階級、地域（6 区分）を考慮して 2,400 人を回収目標とした調査を実施し、最終的に 2,480 人から回答をえた。

(3) 系列分析をもちいた生活時間のパターン分類とその健康への影響の分析

WEB 調査によってえられたデータの分析については、系列データ分析 sequence analysis をもちいた分析をおこなった（Cornwell 2015）。分析には R の TraMineR パッケージをもちいた。系列データ分析では距離行列の計算について様々な計算方法が提起されているが、本研究では最適マッチング法をもちいた。

その結果、高齢期の WLB を考慮する際には余暇活動のあり方が重要であること、また、ケア活動をおこなっている層については、細切れの育児、介護という側面が見られることが明らかとなった。とくに 60 歳以上については以下のような生活パターンが抽出されている。

- ・男性・ケア実施群：5 パターン（就労型、受動的余暇型、積極的余暇型、ケア・余暇混合型、就労・ケア両立型）
- ・男性・ケア非実施群：3 パターン（就労型、受動的余暇型、積極的余暇型）
- ・女性・ケア実施群：5 パターン（家事・受動的余暇型、家事・ケア混合型、ケア中心型、残余、就労後ケア型）
- ・女性・ケア非実施群：3 パターン（家事・積極的余暇両立型、家事・受動的余暇型、就労型）

これらの特徴としては、第 1 に高齢期であっても就労の有無やその長さが生活時間のパターンを大きく規定していること、第 2 に、家事時間よりも余暇の過ごし方が生活時間のパターンを大きく規定しており、睡眠時間や身の回りの用事、移動などの時間はパターンを考えるとそこまで重要なものではなかったこと、第 3 に、ケアについては実施群と非実施群で当然ながら大きな差が見られ、とくに高齢女性についてはケアによって生活時間のパターンが大きく分化していた。

また、ケアの時間を詳細に分析すると、ケアの時間は就労と異なり一定のまとまりをもった時間ではなく、「細切れの時間」となっている傾向が明らかとなっており、これはとくに、家事や就労と両立している人ほどその傾向が強かった。ゆえに中高年齢期の WLB の特徴としては、ケア労働をおこなっている人の WLB は細分化された時間管理という要素が重要であることを明らかにした。

ただし、これらのパターンへの健康への影響は明らかとなっていない部分も多い。健康度自己評価については男性に関しては積極的

余暇型がやや健康度がよいという結果がえられたが、ストレスについては、これらのパターン間ではほぼ差がなく、細分化された時間管理がストレスをうみだすということは示されなかった。そのため、時間の細分化がもたらす帰結について、より詳細な分析を行うことが今後の課題となる。

<引用文献>

Abott, Andrew, and Angela Tsay, Sequence Analysis and Optimal Matching Methods in Sociology, *Sociological Methods and Research*, 29(3), 2000, 3-33

Cornwell, Benjamin, *Social Sequence Analysis*, 2015, Cambridge University Press

Lesnard, Laurent, Setting Cost in Optimal Matching to Uncover Contemporaneous Socio-Temporal Patterns, *Sociological Methods & Research* 38(3), 2010, 389-419

大和礼子、『生涯ケアラの誕生 再構築された世代関係 / 再構築されないジェンダー関係』、2008年、学文社

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

渡邊大輔、一人暮らし高齢者の婚姻歴と社会的孤立、成蹊大学文学部紀要、査読無、53巻、2018、83-97

澤岡詩野、渡邊大輔、中島民恵子、大上真一、都市高齢者のボランティア活動継続への意向に関する分析—よこはまシニアボランティアポイント制度登録者における検討、応用老年学、査読有、11巻、2017、61 - 70

澤岡詩野、渡邊大輔、中島民恵子、大上真一、都市高齢者の近隣とのかかわり方と支え合いへの意識、老年社会科学、査読有、37巻、2016、306-315

中島民恵子、渡邊大輔、大上真一、辻彼南雄、重度認知症高齢者への人工栄養補給の実施における理想的判断と現実的判断、日本認知症ケア学会誌、査読有、14巻、2015年、634 - 643

[学会発表](計 18 件)

渡邊大輔、高齢期における介護と生活時間—『社会生活基本調査』をもちいた 2 次分析、第 90 回日本社会学会大会、2017 年 11 月 4 日～5 日、東京大学

Watanabe, Daisuke, Work, Aging and Cognitive Functioning in Japan: Type of

Work Makes a Difference, The 21th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, 2017 年 7 月 23 日～27 日, San Francisco, USA

Börsch-Supan, Axel, Daisuke Watanabe(6), Integration of Older Individuals in the Labor Market: Global Perspective, Berliner Demografie Forum 2017, 2017 年 2 月 15 日～16 日, Berlin, Germany

Watanabe, Daisuke, Does an Economic Incentive Program for Elderly Volunteers Contribute Care Prevention?, 2016 GSA Annual Scientific Meeting, 2016 年 11 月 16 日～20 日, New Orleans, USA

渡邊大輔、ボランティアポイントプログラムは介護予防効果を持つのか：横浜での 2 年後縦断調査、第 11 回日本応用老年学会大会、2016 年 10 月 29 日、大阪大学

渡邊大輔、高度経済成長初期における老いと就労 1963 年『高齢者生活実態調査』の復元による 2 次分析、第 89 回日本社会学会大会、2016 年 10 月 8 日～9 日、九州大学

Watanabe, Daisuke, Politics of small economic incentives of volunteers in old age: Using a mixed methods approach, Third ISA Forum of Sociology, 2016 年 7 月 10 日～14 日, Vienna, Austria

澤岡詩野、渡邊大輔、中島民恵子、大上真一、都市高齢者のボランティア活動と継続意識：横浜市ボランティアポイント登録者における検討、日本老年社会科学会第 58 回大会、2016 年 6 月 11 日～12 日、松山大学

渡邊大輔、地域のソーシャルキャピタルはだれの健康に影響するのか？、ソーシャル・キャピタル研究における異分野間の学際的知見の共有、2016 年 3 月 12 日、日本大学

Watanabe, Daisuke, Local health promoted group activities and active aging: A case of “Genki Station” in Yokohama, Japan, The 10th Anniversary Fukuoka Active Aging Conference in Asia Pacific 2016, 2016 年 3 月 5 日～6 日, Fukuoka, Japan

Nakashima, Taeko, Daisuke Watanabe, Shino Sawaoka, Shinichi Ogami, Does the Amount of Volunteering Improve Self-related Health?, 2015 GSA Annual Scientific Meeting, 11 月 18 日～22 日,

Florida, USA

渡邊大輔、澤岡詩野、都市高齢者の近隣意識の多次元性と精神的健康：潜在クラス分析による近隣意識の分解、第10回日本応用老年学会大会、2015年10月25日、砂防会館別館

Watanabe, Daisuke, Work-life-balance in Later Life: A Sequential Analysis of Japanese Time-use Survey, 10th Asia/Oceania Regional Congress of Gerontology and Geriatrics, 2015年10月19日～22日, Chaing Mai, Thailand

渡邊大輔、高齢期の近隣意識の多元性と健康への影響、第59回数理社会学会大会、2015年3月14日～15日、久留米大学

Watanabe, Daisuke, Do Small Economic Incentives Encourage Social Participation in Old Age?, 2014 GSA Annual Scientific Meeting, 2014年11月5日～9日, Washington DC, USA

渡邊大輔、介護支援ボランティアポイント制度は誰のボランティア参加を誘引するのか？、第9回日本応用老年学会大会、2014年10月26日、桜美林大学

Watanabe, Daisuke, Promoting Elderly Volunteers and Long-term Care Policy Reform: Through an International Comparative Analysis between Netherlands and Japan, XVIII ISA World Congress of Sociology, 2014年7月13日～19日, Yokohama, Japan

Watanabe, Daisuke, New Approaches of Productive Ageing for Preventive Long-term Care in Japan, IFA 12th Global Conference on Ageing, 2014年6月10日～13日, Hyderabad, India

〔図書〕(計 6 件)

渡邊大輔、ピンピンコロリは健康長寿か、成蹊大学文学部学会(編)『人文学の沃野』、風間書房、2017、245 - 261

渡邊大輔、健康・医療・福祉の社会学、筒井淳也・神林博史・長松奈美江・渡邊大輔・藤原翔(編)『計量社会学入門 社会データをよむ』、世界思想社、2015、170 - 182

渡邊大輔、退職後 プレ団塊世代にとってサークル活動のジレンマとは、小林盾・山田昌弘(編)『ライフスタイルと

ライフコース データで読む日本社会』、新曜社、2015、182 - 200

渡邊大輔、敬老の日 老いを敬うのか、老いを隠すのか、小林盾・吉田幹生(編)『データで読む日本文化』、風間書房、2015、95 - 116

渡邊大輔、子育てストレスと社会的サポート、辻竜平・佐藤嘉倫(編)『ソーシャル・キャピタルと格差社会 幸福の計量社会学』、東京大学出版会、2014、121 - 135

渡邊大輔、子育てストレスと社会的サポート、辻竜平・佐藤嘉倫(編)『ソーシャル・キャピタルと格差社会 幸福の計量社会学』、東京大学出版会、2014、155 - 187

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡邊 大輔 (WATANABE, Daisuke)

成蹊大学・文学部・准教授

研究者番号：20629761